

Weekly Survey

冷戦時代の終結とともに国際政治の規定要因はイデオロギーからエスニシティに。ソ連、ユーゴ、イラク、中国と世界の国々で民族問題が噴出する中、世界一多様なエスニック・グループを抱える米国の、国民統合の理念と、台頭する「多文化主義」を検証する。

中嶋嶺雄

民族的多元性と国民統合

「だれのアメリカか?」(“Whose America?” [pp. 8-13]) と題された今週のカバーストーリーは、近年のアメリカ史研究と合衆国におけるアメリカ史教育を問題にしている。なぜ国際版の *TIME* でこの問題が取り上げられるのかについては、“From the Publisher” (p. 5) の欄で簡潔に述べられている。現在ユーゴスラビアでは、クロアチア、スロベニア両共和国が、連邦からの分離独立を主張している。ソ連、イラク、中国、インドなどでも民族問題が噴出している。第一次大戦後、米ソが世界政治の舞台へ登場したことにより、今世紀の大半を占める70年余りにわたって、イデオロギーは国際政治の重要な規定要因であった。しかし、東西冷戦が終結に向かって現在の現在、イデオロギーに代わって、いわゆるエスニシティ (Ethnicity) が、現代国際政治を理解するキーワードになりつつある。

このような状況の中で、世界一多様なエスニック・グループを抱えながら国民的統合を維持している合衆国は、最先端をいく大実験を行っている国家だと言うことができよう。合衆国の硬貨と国璽 (Great Seal) には「多数の中からのひとつ」(E Pluribus Unum) というモットーが刻まれているが、次々と流入する移民を同化しながら国民的統合を保持していくのは、決して容易なことではなかった。公立学校におけるアメリカ史教育は、長年移民の子供たちをアメリカ市民へと社会化する重要な手段であった。しかしここにきて、合衆国でもエスニシティの顕在化を反映して、従来の白人 (あるいは WASP) の側から見たアメリカ史ではなく、それぞれのエスニック・グループの立場からアメリカ史を学び、教えるべきである、という主張が台頭してきているという。ベトナム戦争での挫折によ

り、国内の冷戦コンセンサスが崩壊した1960年代後半以降にもこうした傾向は強まったが、ポスト冷戦の時代にあって国民的統合を確保するための理念を提示しあぐねている現在のアメリカ社会にあっては、事態はより深刻である。

米国は元来、個人主義 (Individualism) の国として知られ、個人主義の根強さのゆえに理念による国民的統合が維持されるという逆説によって支えられてきた国家である。そうした国家では、必要以上の社会的・民族的集団の台頭は、国民的統合にとってきわめて危険なことである。アメリカ史教育がそれぞれのエスニック・グループの立場からの歴史を重視し過ぎてアメリカ社会の断片化を助長するようなことは避けなければならぬ。

このことをカバーストーリーに続く「エスニシティ信奉、よい面と悪い面」(“The Cult of Ethnicity, Good and Bad” [p. 14]) で強く主張しているのが、ケネディ政権のザ・ベスト・アンド・ブライテストのひとりでアメリカン・リベラル (進歩派) の重鎮と言われる歴史家アーサー・シュレジンジャー 2 世である。シュレジンジャーの意見は多少楽観的過ぎるようと思われるが、米国の多様性ばかり注視し、米国の国民的統合の理念を軽視し過ぎるのは、やはりアメリカ社会の実体を的確に把握することを妨げることになる。ケビン・コスナー主演・監督の『ダンス・ウィズ・ウルブズ』は、ハリウッドの常識を破った放映時間3時間に及ぶ西部劇で、アカデミー賞7部門を受賞し、現在日本でも大ヒット中である。南北戦争を背景にインディアンとの交流を描いたこの映画が米国でこれほどヒットしたのは、アメリカ史を白人の側からだけではなく、インディアンや奴隷として連れて来られた黒人の側からも見ようという現在のアメリカ史研

究・教育の方向と軌を一にするものであったことも興味深い。

今度こそカンボジア和平？

今週の Asia/Pacific 欄は、“Better Neighbors?” (pp. 20-21) と題する外交特集で、カンボジア問題解決に向けての新しい局面が開かれつつあるインドシナ半島情勢を論じている。先週開かれたカンボジア和平会議の模様を伝えつつ、これまで幾度となく失敗してきた和平の試みだが、今回こそ和平が成立するかもしれない機会だ、とリチャード・ホーニック記者がハノイから伝えている。このような変化の大きな背景として、先週ハノイで開かれたベトナム共産党第7回大会については、ベトナムもいまや脱社会主義への世界的潮流の中でドイモイ(「刷新」)をスローガンに体制改革を試みつつあるのだが、グエン・ヴァン・リン書記長らがドゥオ・ムオイ首相らに指導権を引き渡して若干若返ったことに注目し、カンボジア情勢をめぐる国際環境がこの点でも好転しつつある、と述べている。もとより中越関係の改善や、米越関係の改善も見逃せない。こうした変化を受けてタイでは、すでに「バンコク・ブノンペンサイゴン」間のハイウェー建設プランがあることを、バンコク特派員のレポートを交じえて伝えている。

●
World 欄は、ユーゴスラビア情勢である。スロベニアの独立に対する連邦政府軍の武力行使によって、ユーゴスラビアは再び崖っぷちに立っているのだが(“To the Brink, Again” [pp. 24-29])、スロベニアの人々は、すぐにでも幸運が訪れて欲しいと願っている



最初のサンクスギビングデーを祝うブリティッシュ植民地の住民

(happy prospect cannot happen soon enough.) というのが結論である。

今週の Living 欄では、働き過ぎと言われてきた日本人が近年、増え続けている休暇の使い道に四苦八苦している様子を取り上げている(“Hurry Up and Relax” [p. 43])。ある会社では Dream Vacation Contest と銘打ったコンテストを開催し、もっとも優れた休日の過ごし方のプランを提出した社員には、その実現のために補助金を与えているそうである。また、近ごろは「休暇アドバイザー」を教育する機関も出てきており、現在そこで約1200人の未来の「休暇アドバイザー」が訓練を受けているとのことである。通産省も、会社が専任の「休暇アドバイザー」を置くことを勧めているようだ。しかし、記事にもあるように、このような苦労も最近の若者には無縁のようであり、仕事と遊びは、どちらも人間にとって大切なものであり、日本人はそろそろ両者をうまく調和させることを学ぶべき時に来ている、と言えよう。

(なかじま みねお/東京外国語大学教授)



GEORGE EASTMAN HOUSE COLLECTION



GUY W. HARRISON COLLECTION



ITMAN COLLECTION

左から、欧州からの移民(1905年)、婦人参政権要求デモ(1911年)、公民権運動(1957年)